編集後記

■本会誌の準備號として０號をささやかに２０１５年８月発行してから早半年になる。今春『シネマ游人』創刊号を出す感慨の内をみてみた。

今、発起人を中心に今秋の上映会を企画している。映画会誌も伴走して積み重なっていくところで、両面から浮かび上がってくるものを掴めればと思う。そこでは関わって下さる人から人への受け渡しであり、新旧の映画作品、また現実状況が押してくる波動をどうすれば受け留めて共有出来るか挑戦したい。

創刊号は１２名の寄稿となった。今年の活動から、更に多様な方々の参加を頂けるように、それは楽しみな新芽がふくらむのにも似たことと感じている。

（中村）

■昨年３月、義兄の幻の映画『ナンバーテンブルースさらばサイゴン』の上映会を行った。四日市市文化会館第２ホールを借りてしまったため、大変な思いをしたのだが、多くの人達のご協力をいただき、義兄をして「一上映としては最大の観客を集めた」と言わしめる大盛況になりました。皆様に感謝したいと思っています。さて、縁あってその上映会を企画したメンバーで、『シネマ游人 yokkaichi』を立ち上げ、この度創刊号発刊の運びとなりました。多才な方々に寄稿頂き面白いものに仕上がったと自負しています。今年も１１月３日、同じ会場で義兄脚本の映画『軍旗はためく下に』などの上映を計画しております。皆様にも是非、ご協力をお願い申し上げます。

（堀川）

■昨年末、澤井余志郎さんが亡くなった。８７歳だった。あり余る能力を持ちながら、生涯黒子役に徹し、公害患者に寄り添った生涯に敬意を表したい。遡ること７年（２００９年）、ＪＲ近くのビル内に「公害資料室」が出来たというので行ってみた。４階だったか５階だったかの片隅に目指す資料館があった。貧弱な展示室に唖然とした。第一印象は「小中学校の理科教室」という感じで、これが日本の４大公害のひとつにあたる展示室か、と思った。その場に居合わせた澤井さんも浮かぬ顔だった。憤然として帰ってから市長に手紙を出して直訴した記憶がある。今では地元の表玄関に、まずまずの公害資料館が出来、多くの見学者で賑わっている。生きているうちに澤井さんの念願も叶い良かったと思う。

公害Ｇメンとして恐れられた故田尻宗昭は彼のことを「澤井は四日市公害が生んだ歴史的遺産だ」と呼んだ。私は彼こそ四日市の良心だったと思う。もし彼がいなかったら、四日市はまだ公害問題を引きずっていたかもしれないのだから。奇しくも小誌に藤田明氏と谷口晃氏が彼について触れている。余人をもって代えがたい人物だったということだ。弟は映画監督の澤井信一郎で、２０１２年四日市文化会館で兄弟トークをしてもらったことがある。

（林）

■私が幼少の頃に住んでいた亀山市の自宅付近には映画館が２館あった。両親に連れられて映画の洗礼を受けたのは５歳ぐらいの頃と記憶している。アニメの無い時代なので、５歳で大人と一緒に娯楽時代劇を見ていたのである。その時は、映画の大音響と大画面に驚き、大声で泣き叫んでいたことが鮮明に残っている。しかし、年齢とともに映画を観るのが何よりの趣味になり、気がつけばジャンルを問わず半世紀以上、映画を見続けている。

役者がよく「舞台の上で死ねたら本望だ」と言われるように、私は映画館のシートにもたれて、エンドロールを観ながら最後を迎えられたら本望である。

（森）